

# 桜の「復活」

主任司祭 フランシスコ 山口 一彦

今、この原稿を書いているのは、2024年の1月中旬です。半月ほど前には、能登半島でたいへんな地震が起きました。いまだに行方不明者の捜索が続いています。孤立状態の村落、あるいは避難所などで、寒さと不安に震えている人たちがいます。ウクライナやガザでは、激しい戦闘が続いています。北半球の国々では、物質的にも精神的にも、まだまだ春が遠いようです。でも、そんな人の世の騒動を知ってか知らずか、大自然の営みは華やかな春に向けて、着々と歩みを進めていくことでしょう。皆さんがこの文章を読む頃には、水がゆるみ、光が輝きを増していることでしょう。

もっとも、この大自然の歩みの方も、環境を破壊する人間たちの無礼な行いの影響で、記録的な異常気象が繰り返されています。ひと昔前までは、毎年同じような時期に桜が開花して、同じような時期に満開を迎えたものですが、ここ数年は、年々その時期が早まっているように感じます。今年の復活祭は、3月31日。関東では通常、桜が開花し始めている頃ですが、今年はどうなりますでしょうか。満開の桜の光景を想像しながら、この文章をしたためています。

主のご復活に相應（ふさわ）しい花、それは桜をおいて他にない、と私は思います。桜の花芽（かが）は、前の年の夏に作られ、程なく休眠に入ります。静かにじっと冬が過ぎ去るのを待っているのかなと考えてしまいましたが、実は違います。この花芽の休眠を打ち破るのは、冬の寒さなんだそうです。手足が痺（しび）れそうな寒さに晒（さら）させることで、桜の固い花芽は休眠から目覚め、開花の準備に入ります。フィリピンなど、冬のない常夏（とこなつ）の国に日本の桜を移植しても、なかなかうまく開花しないのは、このためです。桜の花が美しく咲くためには、春の暖かさではなくて、冬の寒さが必要だったんですね。

春の嵐（あらし）と言って、3月頃に突然、強い風雨の襲（おそ）ってくる日があります。翌朝、道端（みちばた）には無残（むざん）に折られた桜の枝が落ちています。その枝の折れた傷口をよく観察すると、ほんのりとピンク色に色づいていることに気づきます。目の錯覚かなと思うほどの微（かす）かな色合いなのですが、確かにそれは、私たちが心待ちにしている桜の花びらの色です。

草木染めに「桜染め」というのがあります。2月から3月頃、桜の樹皮や小枝を煮出して作ります。淡くて深い、心落ち着くような染め物が出来上がります。これは他の季節に作ることはできないんだそうです。4月の開花に向けて、桜の木は全身で準備をしていたんですね。あんなにゴツゴツしていて、固くて醜（みにく）い幹や枝の内側で、一生懸命、桜色になろうとしているんですね。

私たちはイエス様の後に従って、いつの日にか復活の栄光に入っていくことになります。神の子が約束して下さったんですから、間違いありません。でも、そのためには、これもイエス様と

同じように、私たちも受難に耐えなければなりません。桜の開花のために厳しい冬の寒さが必要なのと、よく似ていますね。

ならば、桜を手本にしましょう。復活の開花に向けて、一生懸命、全身でピンク色に染まっていく桜のように、私たちも復活に向けて、全身で準備をしていきましょう。それは、全身を「愛」で染めることです。冬の寒さのような、人生の厳しい苦難に出会った時こそ、安穩（あんのん）とした休眠から目覚め、外側の見かけに拘（こだわ）ることなく、心の内側を「愛」一色に染めていきましょう。この努力に、イエス様は必ず応えて下さることでしょう。神様の栄光の中で、私たちの可能性を全て開花させて下さることでしょう。

皆さんがこの拙（つたな）い文章を読んでいる頃、震災の被災者たちに、少しは寛（くつろ）げる日々が訪れているのでしょうか。戦争やコロナやインフルエンザはどうなっているのでしょうか。もしかしたら全く別のことで、皆さんお一人おひとりの上に、個別の大問題、予期せぬ混乱や騒動が生じているかもしれません。でも、永遠に続く試練などありません。「復活」は必ずやってきます。何が最も大切なことなのか、それを自問自答しながら、桜のように怠（おこた）りなく、内面の準備を続けていきたいものです。